

論説

井伏鱒二『花の町』における多言語空間の語り方

李 郁蕙

1. はじめに

1943年に文芸春秋から出版された井伏鱒二の『花の町』は1942年8月17日から10月7日まで50回にわたって『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』に同時連載された「花の街」を改題した作品である¹。執筆当時、井伏は徴用中で日本軍占領下の昭南島（現シンガポール）に滞在しており、陸軍報道班員として英字新聞『昭南タイムス』の編集や日本語学校「昭南日本学園」の講義などの宣撫・宣伝活動に従事していた²。井伏の回想によると「大本営命令」³という名目で執筆を依頼された経緯があったことから、いわゆる「宣撫班小説」⁴あるいは「徴用文学」⁵として国策的要素を持つものと思われる。しかし興味深いことに、その内容は「嘘ではないかと思はれるほどに平和」な街と「疑ひなく」その「平和を信ずる市民」があることを知ってほしいという本人の意思を反映して戦争には全くといっていいほど無縁の風景であった⁶。「マルセンの旦那」「五十五番館」「緑陰」「ベン・リヨンの家」「ジャランジャラン」「善隣協会」⁷と名付けられた6つのセッションは、現地での日常の些細なエピソードを断片的に綴っているだけで、しかもその大半は異言語話者間のミスコミュニケーションにまつわるため、明るくほのぼのとした印象さえ感じられる。

この点について、先行研究では井伏の一貫した作風であると説明されてきた。例えば、平野（1972）は「天性日常的な世界しか書けない生理」、野寄（1995）は「岩屋に軟禁された身体ゆえの遠慮と屈託」、松本（2003）は「事実の記録者たらしとする姿勢」、黒古（2014）は「戦争への処し方」と評する。一方で、その奥に深い批評性が潜んでいるという見方もある。年代順に挙げ

ると、前田（1983）は本来マレー語によって担われる共通語の役割を強奪しようとする日本語普及工作の戯画化が井伏の「抵抗のかたち」だと指摘する。青木（1988）は多言語社会で言葉の障害に焦燥感を掻き立てられる日本人と、バックボーンがなくあからさまに阿諛迎合する住民との歪んだ関係性を見つめたことから、井伏の持つ「社会批評の視点」を明らかにした。宮崎（2006）は井伏が占領地における「非均等的な力関係」の固定化に加担しないスタンスを貫くため、語りの戦略を通じて日本語の独占的権力性を頓挫させたという。滝口（2011）は「平和」の裏に隠れる人々の窮状や他の言語の混入による日本語のピジン化をほめめかすことに、井伏の日本や日本語の同一性に対する懷疑と加害者としての自覚がうかがえるとしている。

方向性は異なるものの、それぞれのアプローチで言葉の問題に焦点が当てられているといえる⁸。これを真正面から取り上げるものとして塩野（2010）が付け加えられる。

以上を踏まえてみると、この小説は単に多言語状況があることを指し示しているのではなく、むしろその多「言語」体系さえ疑わしい状況——すなわち、言語の規範が揺れ、変質し、更新され続けるその動態——こそが「日常」なのである。作中の言語行為は、登場人物それぞれの意図が示唆されながら、時に相乗し時に反目して繰り返される。そこでは使用言語によって人物の造形も適宜変更され更新されることになる。「花の町」においては、こうした錯綜自体が「日常」であり、常に変容する契機を孕みながら不安定な状態のままで営まれていくのである⁹。

塩野は、『花の町』の評価で重要なキーワードである「日常」の意味合いを再検討すべく、作中の言語状況に着目したうえで上記のように結論づけた。少し補足すると、語りが登場人物の言語行為について加えている丁寧な説明から多言語状況であったことは明白だが、塩野の考えではもう一つ見逃せないことがある。それは、すなわち、話者の言語習熟度或使用場面によって誤用や誤解が常に生じて言語規範の限界を露呈させていることだ。言葉自体不安定で揺れ動くため、それを使う人間同士の関係性も一定に保てない。こう

したダイナミックな様相を通して、井伏が言葉の抑圧的なプロセスを可視化させ、南方表象の欺瞞を照らしたということである。

井伏の言葉への強い関心は、創作活動を始めた当初から見られる。例えば、「朽助のある谷間」(1929)や「言葉について」(1933)を含めた戦前の作品では方言や古語、外国語が多用されており、塩崎(1996)の表現を借りれば一種の「言葉のざわめき」に満ちた状態を呈している¹⁰。特に方言については、井伏の出身地にある備後方言の発音を基調としつつ、独自のアレンジを加えられた「デフォルメ」とされる(野地 1956、藤本 1984)。その意図も「郷土への回帰」ではなく、むしろ逆説的に「声＝他者の固有性」を確保したうえで収奪することにより均質的な言語秩序への反発を示すためといわれている(宮崎 2002、新城 2003)。これらの示唆を受け、方言よりはるかに標準語とかけ離れる英語など他の言語の音声に対し、井伏はいかなる受け止め方をしたかと疑問に思ったのが本稿の出発点である。もっといえば、日本語を使用することが前提の下で、井伏は具体的にどのような方法を駆使して異なった言語によるやり取りを的確かつユーモラスに描くことができたのか。また、その過程で日本語の規範にどう折り合いをつけ、もしくは変容させたのか。これらを検討することにより、井伏の研ぎ澄まされた言語感覚を把握するとともに、戦前日本の支配下にあった植民地や占領地を訪れた一人の文学者としての立ち位置を改めて確認したい。井伏と同じ時期に、徴用、派遣または旅行で東南アジア渡航経験のある作家が大勢いた。特に日本語普及問題をめぐって、南洋群島(現ミクロネシア諸島)のパラオや蘭印(現インドネシア)のジャワ島で教科書編纂や日本語教育に携わっていた中島敦や阿部知二がよく取り上げられる¹¹。また、高見順や里村欣三のようにビルマ(現ミャンマー)や北ボルネオ(現マレーシア)の民族的多様性に対する認識が注目を集めた作家も少なくない¹²。彼らに勝るとも劣らない井伏の眼差しの鋭敏さ、そして何よりも方法の独特さを明らかにするのが本稿の目的の一つである。

2. 多言語空間の開示

まず、主要登場人物を出身別に分けると、「マルセンの旦那たち」こと軍宣伝班員の木山喜代三・神田幸太郎・築地弁二郎・花園洋三と河野という名を

持つ軍曹は日本人、骨董屋老人シンフハと昭南日本学園生徒ベン・リヨンとリヨン家の母アチャンと姉トミーは「支那人」、不良青年ウセン・ベン・ハッサンと下男タムリンは「馬來人」、新聞記者ウェルフェアは「ユーラシアン」となる¹³。そして、名前がついていない「アラブ人」や「印度人」も数えれば、およそ 6 種類の民族またはエスニック・グループが「人種の展覧会」¹⁴のように混在し、ジェスチャーや筆談含めてさまざまな手段でコミュニケーションを図る。

a. このお寺帰りの娘たちをお客に当込んで、ひさしぶりに長屋の前の原っぱに蛇遣ひがやつて来た。彼らは例によつて瓢箪のやうな格好の笛を吹き、小さな鼓を打ち鳴らし、一座の親分は客寄せの口上を述べた。「皆さん、さあさあ早くお集まり願ひます。これは危険なる蛇、コブラの踊りでございます。」

彼はアラブ人だがマライ語でいふのである¹⁵。

b. 店の老人はさういつて、つかつかと歩いて店の出口に行き、そこから隣のうちのドアに向つて声をかけた。

「ベン・リヨン、アー。ベン・リヨン、アー」

そして彼は支那語で何か大きな声でいひ、やがて店のなかに引返して来て英語でいつた。

「ただいま、私は隣のドアの子供ベン・リヨンに、お茶を持つて来てもらひたいといひつけたのである。私は轉軻孤独の身の上で、お茶をわかすのも億劫なときがある。最近は何かにつけ、ときどき隣のドアの厄介になる習慣がついて来た。」¹⁶

c. しかしベン・リヨンは答へた。

「私の信ずるところでは、骨董はコツトーと書くべきであると思ふ。」

はつきりといふのである。

ベン・リヨンはゆつくりとした発音の英語でいつた。現地人がマルセンの旦那たちと対話する場合には、ゆつくりと発音するのが大事である

ことを彼は心得てみた。しかし彼のいふところは、言論としてなかなか強硬であつた¹⁷。

d.さうして神田幸太郎は人力車夫に云つた。

「おい、こつちだ。」

日本語でさういつて、右を指さした。この街の人力車夫は全部が支那人で、全部が或る支那人のボスに統制され、全部が支那語かマライ語しか解さない。

「おい、ここだ。止まれ、止まれ、ストツプ、ストツプ。」

神田幸太郎は人力車を止めた¹⁸。

e.女給はナイフでゆつくりと鉛筆のさきをけづり、なほ次のやうに書き足した。実に悠長なものである。

「我們祇会中国語呀、如此、請僱用中国字写備的意志在這紙上吧。」
——自分たちは支那語しかわからない。それでこのカードに漢字で答へを書いてくれといふのである。

木山は鉛筆とカードを受けとつて、いい加減に漢字を書きならべ料理の注文をした。

「我等要啤酒、小瓶的、没有問題。而我要、這樣食物、每様兩碗。」¹⁹

a の引用における「マライ語」はほかの箇所では「馬來語」とも表記され、マレー語に対する当時の呼称である²⁰。b の「支那語」は中国系移住者の大半が出自とした華南地方一帯の広東語か福建語のどちらかを指すと思われる²¹。c の「英語」への言及は音声面の特徴にとどまっているが、東南アジアでよく使われる「ビジン・イングリッシュ」である可能性が高い²²。d の「日本語」は現地では新参者という立場でごく一部の人にしか通用しない現実がある。e の「漢字」はいわば一種の記号で文法的に多少の誤りがあっても理解の妨げにはならない。これらの手段を取るのは、母語話者はもとより、非母語話者も含まれる。アラブ人は馬來語、支那人は英語、日本人は英語を話すなど、話者の民族出身と使用言語は必ずしも一致しない。さらに、同一人物が上記

とは別の言語を話す場面も見られる²³。全文日本語で記述される中、どの発話がある言語によるものなのかを判別する手がかりとして、前後の地の文が重要な役割を果たしている。

先行研究によれば、『花の町』の語りは次のような特徴がある。一つは三人称形式を用いながらしばしば木山の視点に同化することであり(宮崎 2006)、もう一つは誰が何語でどう話したかを過剰なほど提示することである(塩野 2010)。前者により言語間の「序列性」²⁴が、後者により言語間の「範列性」²⁵が浮き彫りにされたというが、要するに作中の多言語状況の生成は語りによるところが大きいと考えられている。そもそも二次元的で通常一言語のみ使用する文学のテキストで複数言語環境を構築することは容易なことではない。とりわけ、本作のような、言語集団が多数存在するだけでなく、それぞれ母語または特定の言語を話すとは限らない場合はいっそう困難になる。それを解決するために井伏が用いた一つ目の方法は異言語話者の接触場面ごとに説明を挿入するというオーソドックスなものであることが分かる。

3. 語る視点の転換

ところで、前出の引用 b で登場する骨董屋老人シンフハの発話をめぐる語りは興味深いものがある。英語で話した内容はカギ括弧を用いて直接話法的に処理されているのに対し、支那語で話した内容の提示はなぜか人名の部分で途切れ、続きは「何か大きな声」と間接話法でなされている²⁶。その内容は直後にシンフハ自身によって「ただいま、私は...といひつけたのである」と英語で補足されるが、下記 f、g、h の 3 例では、支那語や馬來語で発せられたものは「何やら」「何か」と伏せられたままである。

f. 骨董屋の老人はペンキ屋の支那人に何やら支那語でいひつけると、店の中に入つて行つた²⁷。

g. そしてこの老人が支那語で何やらベン・リヨンにいひきかせると、ベン・リヨンはおぼつかない日本語で木山にいつた²⁸。

h. 木山はシンフハ骨董屋の前で車を降り、その店の入口にみたシンフハ老人に声をかけた。老人は日本の下士官に馬來語で何か話してみた²⁹。

シンフハと同じく支那語と英語と馬來語を操れるほか、日本語まで習得したとされるベン・リョンの発話に関しても、似たような語り方がなされている。引用 i はベン・リヨンが日本語で木山の質問に答えた後馬來語に切り替えてタムリンに話しかける場面、引用 j は支那語で人力車を止めた後英語で木山に向かって頼む場面を描くものである。どちらも日本語と英語による発話は経緯や意図を含めて細く書かれているが、支那語や馬來語による発話は「何やら」「何か」と叙述の中に組み込まれて伝えられていない。次に続く動作から実際どのような内容であったか容易に想像できるとはいえ、再現すべき対象から外されていることは明らかだ。さらに、引用 k の例が示すように、たとえ彼が支那語で発した音声は「ほうい」「チョメヤ、チョメヤ」と受け止められたとしても、後ろに「といふやうな」が付け加えられ、あくまで正確な情報として扱われている。これらのことから、作品全体を通して支那語や馬來語の発話はほとんど聞き届けられていないといえよう³⁰。

i. 木山喜代三は、わざわざ出かけて行くのは億劫なので、あたりさりのないことをいつてみた。

「いま僕は、チシヤの苗床をつくつてゐる。君は、チシヤといふ野菜を知つてゐますか。日本語ではチシヤ、又はチサといふ。」

ベン・リヨンは「いえ、私は知りません」といひながら、半ズボンのポケットから和英の袖珍辞典をとり出した。そして「チサ、チシヤ、チサ、チシヤ」と小声でくりかへしながら、器用に頁をめくつてその字を引きあてた。

「はい、私はチシヤを、知つてゐます。そして、いま私は土を耕すことをします。馬來人は、農業を大変きらひです。」

ベン・リヨンは、それから何やら馬來語をつかひ、タムリンの手からシヤベルを受けとつた³¹。

j.二人を乗せた人力車は、カセイ・ビルの前を通りすぎた。ベン・リオンは不図、支那語で何か車夫にいつて車をとめ、さうして木山喜代三に英語でいつた。大事をとつて彼は、使ひなれた言葉でいつたわけである。

「木山の旦那、私は貴方の御寛容を願ひたい。私はここで車を降り、長屋の裏側を通りぬけ、裏口から私の家に帰りたい。そして貴方には、表戸から単身訪問して頂くやうに願ひたい。この段取りは、ウセン・ベン・ハツサンに乗ぜられないための備へである。いふまでもなく、私の家はシンフハの店の右隣のドアである。」³²

k.そして骨董屋の隠居は隣の家緑色の塗つた扉を見て呼んだ。

「ベン・リオン、ベン・リオン、出て来い。ベン・リオンはゐないのか。」

すぐ扉の中で「ほうい」といふやうな答へがあつた。そして扉を開け、背の高い色の白い支那人が跣足で現れた。スポーツシャツに白の半ズボンを穿き、子供と大人と相半ばしてゐる年頃の者と見えた。

これが昭南日本学園の秀才だといふベン・リオンである。彼は「チョメヤ、チョメヤ」といふやうなことを口走りながら駆けつけて来て、そこにマルセンの旦那がゐるのを見ると立止まつて敬礼した³³。

つまり、語りは人物同士の意思疎通手段として計4種類の言語に触れつつも、言語によって異なる語り方を使い分けている。母語話者人口の割合が高く、より頻繁に登場するであろう支那語と馬來語のほとんどは多言語話者自身の言い直しや通訳で後景化される³⁴。唯一の例外は作品の冒頭部から抜粋した引用aでアラブ人蛇遣いが発した客寄せの口上である。馬來語で話した内容を「お集まり願ひます」とか「踊りでございます」といった言葉遣いの丁寧さまで察知していることから、語りは最初にジュネットがいう「非焦点化（焦点化ゼロ）」³⁵、すなわち全知的な視点を取っていたことが分かる。しかし、途中から木山を視点人物とする「内的焦点化」に切り替え、支那語と馬來語を意味の分からない音声として扱うようになる。こうした視点の転換はなぜ起きたのか、先行研究では取り上げられてこなかったが³⁶、本稿ではここに井伏が単一言語で複数言語環境を描くのに用いたもう一つの方法があ

るのではないかと考える。なぜなら、そうすると日本軍宣伝班員と英字新聞編集者の身分を持つ木山が知り得る範囲内の発話行為だけに絞ることができるからである。もちろん、その目的は必ずしも叙述上の便宜を図るためとは限らない。むしろ、意味の伝達のみで満足できないという井伏の言語に対するこだわりが背後にあると考えられる。詳細は次節で述べる。

4. 英語発話の再現

大きく日本語と英語の2つに分けられる発話のうち、英語を用いた部分は前出引用eにおける漢字筆談のような原文と意味を併記する形式ではなく、日本語に書き換えられている。したがって、見た目ではカギ括弧に括られているが、その内容は厳密にいうと直接話法を通して「再現された言説」ではなく、自由間接話法によって「転記された言説」に属する³⁷。言い換えれば、表面上語り手が一旦消え去ったように見えるが、実は作中人物の口を利用して語り続けている。前述した木山の内面を通して支那語と馬來語を退けるのも典型的な例だが、要は「語る側と語られる側との境界線を意図的に曖昧化する」³⁸この話法はフローバールから始まり、『ボヴァリー夫人』(1857)などの作品を通して19、20世紀のヨーロッパ文学だけではなく、日本の作家たちにまで影響を及ぼしていた³⁹。では、それを受容した一人とされる井伏は、どのような言葉を作中人物に与えるかを、英語発話を多く含むエピソードから見てみよう。

1.そこで、四十男のマルセンの旦那はヘルメツト帽を脱ぎ、あまり上手でない英語でペンキ屋に尋ねた。

「一寸失礼。しかし僕の思ふには、諸君は看板に書いてゐる片仮名のことで議論してゐるらしい。日本の片仮名は書き易いやうであつて書きにくい。そこに困難もあり、また文字からの深い味はひが感じられる。素朴であり、かつ含蓄するところ深遠なのである。」

ペンキ屋は英語が話せないと見え、両手をだらりと下げて手先だけ忙しく振つてみせた。これは否定またはどうにも困つたといふ場合などに使ふ仕ぐさである。骨董屋の主人も同じやうな仕ぐさをして見せたが、

彼は英語で早口に云った。

「このペンキ屋は頑固である。自分は隣の家のペン・リヨンにこの紙片のこの片仮名を書いてもらった。ベンは昭和日本学園の生徒である。」

骨董屋の老人は六十歳前後の男だが、彼は痩せて無闇と背が高く「瘦軀鶴の如し」といふ既製の形容語がそれに当てはまるやうであつた。彼のその他の特徴は、眉毛の尻が垂れ下つてゐることと、小指の爪がえらく長いことであつた。もう一つの特徴は喋る英語に **R** の発音が強く響くことで、ここの現地支那人としては珍しい⁴⁰。

「四十男のマルセンの旦那」とは木山のことである。骨董屋の看板に書く片仮名が「コツトウ」か「コツトー」でシンフハ老人とペンキ屋が言い争う横を通り過ぎ、「あまり上手でない英語」で仲裁に入ろうとした。それに対するシンフハの返答は「早口」で「**R** の発音が強く響く」特徴的な英語とされる。個々の音声的特徴はともかくとして、全体の発話速度は主語と述語を備えた短い単文が不自然に連続していることから伝わってくる。

m.この者は石の階段を下りて来て、急ぎ足に庭の芝生を踏み、神田幸太郎の方にやつて来た。そして満面こぼれるばかりの愛嬌を見せ、神田幸太郎に握手を求めて流暢な英語でいつた。

「マスター・カンダ、私はあなたにお目にかかることができて大変に嬉しい。しかも昨日はあなたの御親切により、私たちの学校の看板の誤字を発見することができた。私たちは早速ペンキ屋に命じ誤字を修正させたので、幸ひ大過なきを得たのである。」

神田幸太郎は明らかにまごついて、あまり上手でない英語でいつた。「いや、あなたはあまりにも楽観的である。あの看板は決して大過なきを得てゐるとはいわれない。もしあなたが、あの看板が大過なきを得てゐると力説されるなら、あなたは私を愚弄されるも同然である。」

「おお、それは意外千万である。」

校長先生もまごついたやうで、ステツキを上下に振り、そして神田幸太郎と並んで看板の正面の側に立ち廻った。神田幸太郎はじつと看板の

字を見つめ、急に口をきかなかつた。きつと彼は、自分の今いほうとする内容を心の中で英語に翻訳してみてものに違ひない⁴¹。

別の場面では、昭和日本学園の園長神田幸太郎が「オーチャードロード・ガールズ・スクール」と掲げる学校の看板で「ガ」の表記誤りを見つけ、校長に濁音と半濁音のつけ方を説明したうえで修正を命じた。その指示に従ったつもりで「ポーイス」と直した校長が翌日満面の笑で神田にお礼をいう。二人の間にあったちぐはぐなやり取りは「流暢な英語」と「あまり上手でない英語」の差から生じたものと思われるが、前者につられて「大過なきを得る」という語句を2回繰り返したり、急に言葉につかえたりする後者のうろたえぶりがその一端を物語る。

このように、語りは常に地の文において発話者の手段や意図とは別に英語能力の高低に関する情報を提供する一方で⁴²、それぞれに合わせて会話文の表現をアレンジしていることが見受けられる。青木（1988）はこれら会話の中で「英文直訳体」及び漢語が多用されていることに注目し、英語に不慣れた日本人発話者の苦痛を読者に迫体験させる井伏の意図が背後にあると指摘した⁴³。その分析によると、井伏は一文ずつ「主語、述語、目的語が忠実に整えられ」る「まわりくど」さや、漢語が醸し出す「大時代」な雰囲気を巧妙に利用して笑いを誘ったと同時に、占領者でありながら孤立させられる日本人の危機的な立場を捉えたということである。

青木がいう「英文直訳体」とは具体的に何を指すか明記されていないが、主述関係への言及からいわゆる「欧文直訳体」もしくは「欧文脈」と同義だと思われる。近代以降西洋語の翻訳を契機に出現したこの文体は漢文訓読の方法と同様に一語一語に訳を付け、日本語の語順に書き下す中から形成されたものである。典型的な用例としては、上記2つの引用部分からいえば、代名詞（「自分は」「私は」「あなたは」）、無生物主語（「あの看板は」）、非人称主語（「それは」）などの語彙、及び仮定法（「もし...なら」）といった接続表現が挙げられる⁴⁴。大げさな漢文調に対し、こうした「パタ臭い異質的な外国風」の翻訳調は「拙劣」な印象を与える⁴⁵。それらをあえて取り入れて独自の文体を創り出したとされる作家は横光利一や堀辰雄のほかには井伏がいる⁴⁶。

『花の町』に限らず、デビュー初期の「言葉」(1926)から、「山椒魚」(1929)、「へろう宿」(1940)まで特に戦前の井伏文学を語る際に、翻訳調は避けては通れないキーワードの一つになっている⁴⁷。その摂取は文学活動を志す1920年代前半からドイツの劇作家ブーダーマンの『父の罪』を抄訳したことにさかのぼられる⁴⁸。また、徴用を受ける前の1940年に手がけたイギリス人作家ロフティングの『ドリトル先生』の翻訳とも無関係ではない⁴⁹。これらの影響により、井伏は作品の中で翻訳調を頻繁に使用し、その目的は複数言語的状況の示唆を通してアプリオリな均一言語共同体の脱構築に取り組みむためと考えられてきた⁵⁰。

しかし、直訳体が日本人側の発話だけに用いられるわけではないことはさておき、もし文体のことを取り上げるのなら、文末の「である」という表現も見逃すべきではないだろう。今では客観性が求められる文章を書く上での標準文体である「である」は、元々話し言葉の「だ」「ちゃ」と同じ語源を持つ。書き言葉としての役割は、蘭学などの翻訳で英語のbe動詞のようなコブラ(連辞)に当てられたのが始まりだといわれる⁵¹。19世紀末尾崎紅葉らの試みによって小説やジャーナリズムでも登場するようになったが、定着までその断定的な響きは「ハイカラ」で「高級」かつ「近づきたい」感を持たれていた⁵²。それへの風刺を込めて夏目漱石が『吾輩は猫である』(1905)を書いたことは周知のとおりである。動物という設定に加え、「である」とのたまうもったいぶった言い方は諧謔味あふれる作品の性格を決定づけている。もう少し年代の近い例を挙げると、谷崎潤一郎は『文章読本』(1934)の中で「である」を現代口語文のうち最も文語体に近い「講義体」として分類し、「儀式張った感じを伴う教壇や「公衆」を相手にする文章を書くのに適するものの「日常個人を相手にして話す時」には使わないと説明した⁵³。実際喋るように書きたい時は「センテンスの終わりの音に変化」があり、「性の区別」もつきやすい「会話体」を活用すべしと主張している⁵⁴。要するに、語り手が語る地の文には「講義体」、作中人物の声で語っているように仕向ける会話文には「会話体」で書き分けるのが定型だと考えられている中、『花の町』はその型にはまらなかった。英語の発話内容を記す会話文は、次の引用nに示すようにベン・リヨンの母と姉の部分だけが「ですます」体で、ほかの全てが

「である」体で締めくくられている。しかも、どちらも語尾に「ね」や「よ」など語気を添える終助詞や間投助詞がなく、生身の人間が発すると思われなようなゴツゴツした生硬さが残るものであった。

n.娘は英語で呟いて、両手を胸さきのところで打ち合して見せる真似をした。そして彼女は、木山の正面の椅子に腰をかけてゐる婦人を見ていつた。幾らか吃るやうな発音で、しかし早口にいふ英語である。

「ママー、ママー。あの怖るべき馬來人は、上衣をぬぎ、それから靴の拍車を取りはづし、悠々と立ち去つて行きました。」

そこで婦人は漸く笑顔を見せ、娘の滑稽な振舞ひを矢張り英語でたしなめた。

「トミー、あなたはおお客様の前で、ピエロ役者のやうな仕草を演じました。あなたがあの馬來人と同類でないことをお客様に披瀝するためには、あなたは最も恭順な態度を保たなくてはなりません。」⁵⁵

5. 発話文体の選別

引き合いに日本語発話を出せば、その特徴がより顕著になる。まず、母語話者同士の会話では、親疎の差によって文体が変化している。例えば、下記引用 o における木山と神田はあだ名で呼び合う間柄であることから常体の「だ」で話す。二人の話題に上った築地弁二郎は同じ宿舎に住む別の宣伝班員で、昭南日本学園卒業式のため英語で演説することになっている。その練習で読み上げる原稿の一部が谷崎のいう公共向けの「である」体を用いていることは注目に値する。

o.木山喜代三はコツプを置いて神田幸太郎にいつた。

「弁二郎は、ラツフルス大学をこきおろしてゐるんだね。しかし、僕も同感だ。あの大学は、東京の市立中学よりも規模が小さい。」

「いや、やつと僕はわかつた。弁二郎は、演説の練習をしてゐるんだよ。」

そして神田幸太郎は木山を手で制した。

「静かに、静かに。弁二郎のために、僕たち静かにしてやらう。明日、

カセイ・ビルの大劇場で僕の学校の卒業式がある。弁二郎はその式場で、一席英語で弁じることになってゐる。」

「さうか、では静かに静かに……」

二階で弁二郎の歩く靴音がした。彼が部屋のなかを歩きまはりながら、演説の原稿を朗読してゐるのが明らかであつた。

弁二郎の演説は続くのである。

「その後、予はこの市内の各小学校を巡視しつつ、学問ならびに遊戯の庭を失つた子供等を見るにしのびず、学校を再び開くことが予の最大急務なることを信じざるを得なかつたのである……」⁵⁶

一方、引用 p における木山と軍曹はベン・リョンの家で偶然居合わせただけで、別れ際に軍曹が自ら河野と名乗り出るまでお互いの名前も出身も知らなかった。広場で一緒にブランコを漕ぎ、英語の can である「キャン」と散歩を意味する馬來語の「ジャランジャラン」で洒落を言つて笑い合うが、「です」という敬体から二人の距離感がうかがわれる⁵⁷。

p.二人は汗だくだくになつたので、どちらがいひ出したともなくブランコを漕ぐのを止した。そして木山が「では、ジャランジャランでもしてみませうか」といふと、軍曹は汗を拭く手をやめて笑ひ出した。とても愉快さうに笑ふのである。彼は散歩のジャランジャランと、有難うのテレマカシと、花のブンガと、この三つの言葉以外には、馬來語はまだなんにも覚えてゐないといつて笑ふのである。この町に入城すると彼は重いデング熱にかかり、それが恢復期に近づくとアミーバ赤痢の病虫に肝臓を冒されたさうである。漸く一昨日退院を許され原隊に復歸して、今日午後五時から十時まで自由外出を許されたといふ。それで街の様子もよくわからないし、馬來語も覚える機会を持たなかつた。英語もここで実用になり得るのは「キャンか？」といふのと「ノー・キャンか？」といふのだけを新しく覚えたさうである。キャンとは可能の意味の Can である。しかし兵隊さんのよく使ふ「キャンか、キャンか」といふ言葉は、いろいろの場合に応用できて重宝であり、且つは軍隊式の感じでそ

つがない。

「貴方はジャランジャラン、キヤンですか、ノー・キヤンですかね。」

木山がたづねると、軍曹が「キヤンです」と笑ひ声で答へた⁵⁸。

次に、非母語話者による日本語発話の場合、被支配者という立場に相応すべく「ですます」体を使用している。計 2 名の発話者のうちの一人は 1942 年 5 月に開校された昭和日本学園で第一期日本語教育課程を修了したベン・リオンである。優秀な成績を収めた「秀才」といわれるが、わずか 3 か月しか勉強しておらず、日本語のレベルが知れる。その様子は、引用 q ではまるで教科書のモデル会話を復唱するかのように文頭に応答詞の「いえ」や「はい」をつけたり、引用 r では「たどたどし」く文節を分けたりすることで表現されている。ちなみに、彼のレベルに合わせて「ゆつくりと」話さざるを得ない木山のセリフは対照的な常体であることと、読点「、」で細かく区切られていることも興味深い。

q. しかし、ベン・リオンはいつた。

「いえ、私はあなたのいふことがわかりません、それは何の用事でございますか。あなたは何が欲しいですか。私は日本語をよく話せません。

はい、私は広東語と福建語と英語とマライ語が話せます。はい、あなたは何が欲しいですか。あなたはそれを早くいひなさい。」

これらの日本語は昭南日本学園のガリ版刷りの教科書にみんな書いてある。要するにベン・リオンは学校で教はった言葉だけを器用に組合せて喋つて見せたわけである。しかし秀才とはこんなものかと心のなかで借問するのは罪が深い。それよりも日本語に対するその熱意がまづマルセンの旦那の気に入つた⁵⁹。

r. ベン・リオンは日本語で答へた。一語づつ考へながら発音して、それは可なりたどたどしい日本語であつた。

「はい、貴方は私に、たづねて下さい。貴方は、ウセン・ベン・ハツサンと、睦まじの友ですか。しかし、何を貴方はたづねますか。」

気をつけの姿勢をしていふのである。これは昭南日本学園の教室で、生徒が起立して答へるときの典型的な姿である。気をつけの姿勢はしてゐるが、思ひきつて顎を突き出してゐる。

木山喜代三も日本語で、相手にわかりやすいやうにゆつくりといった。「私は、ウセン・ベン・ハツサンをすこしも知らない。名前も、知らない。しかし、私は彼に、会いたい。」⁶⁰

もう一人は 1942 年日本占領前商会経営の日本人宅に住み込みで働いた経験から日本語を覚えたというウセン・ベン・ハツサンである。ベン・リヨンと比べて日本語が一段と上手だが、見よう見まねで身につけたことは引用 s のように口語的な「んです」や、「したです」といった文法的な間違いに表れている。また、日本人とのつながりを悪用しようと企むという設定から、発話の語気になれなれしさを強調するために「ね」が多用されていることは見逃せない。前掲ズーダーマンの『父の罪』に関する翻訳の中では、語尾の微妙たる部分を操作して口頭表現のバリエーションを増やす手法がすでに確認されている⁶¹。ここで一つ付け加えておきたいのは、その適用対象が標準的な言葉遣いを逸脱している地方の方言にとどまらず、非日本語母語話者による訛りや誤用まで含まれていることだ。そして、同じ非母語話者が話す日本語を差異化する装置としてみても、カタカナ表記や「てにをは」を欠落させた構文が一般的だった当時において、このように文末の終助詞を利用するパターンは極めて斬新なものがあることも添えておこう⁶²。

s.木山喜代三は「こいつ、馬鹿野郎」といひたいのを我慢して、この馬來人のぼつりぼつりと話して行く日本語を、ついでに我慢して聞いてゐた。

「私、名刺を貴方にあげたいですが、いま持たんですね。印刷屋に注文したのですが、日本の片仮名の活字がないと云ふんです。貴方は名刺を持つてみますか。なんなら一枚下さいね。」

おとなしさうに顔を伏せ、いかにも恭順の意を表す態度でいふのだが、彼のいふこと自体が不躰であつた⁶³。

以上をまとめると、日本語発話は発話者の出身や立場、関係によって文体が異なるうえ、発話の正確性ないし流暢さを反映しようと細やかな工夫が凝らされている。ここから振り返ってみれば、英語発話の文体はいかに特異であるかが浮き彫りになる。形式上、作中人物自身が語り手の代わりに話す会話文として処理されているが、内容は一般的に使われる口語表現とはかけ離れたものが多い。性別の違いを優先して敬体で書かれる女性話者の発話を除き、断定的でとっつきにくい「である」体の使用と聞き手の注意や共感を促す終助詞などの欠落により、無機質的な説明調で一方向的にしゃべっているように感じられる。細部まで緻密に計算された日本語発話との比較でいっそう際立つこの差はどう考えればよいか。最も合理的な解釈として、これもまた逆の意味で会話文作りに対する井伏のこだわりそのものであろう。つまり、全員非母語話者同士の中で交わされた不得要領な英語会話を表すために意図的に口語的要素を省かせたのではないかと考えられる。もっといえば、支那語と馬來語が意味不明の音声として処理される背景には的確な把握や再現に困難を伴うという井伏の潔さがあったといい。そして、こうした人工的な語感、作品全体の滑稽味を増すと同時に、読者にとって日本語の活字で埋め尽くされた文章の中で異なる言語手段が混在していることを認識する目印となる。この点において、複数言語環境を描く上で井伏が用いた三つの方法として見なすことができよう。

6. おわりに

本稿の考察対象は井伏が 1942 年陸軍報道班員として南洋へ徴用された体験に基づいて書いた『花の町』である。この作品では、日本人をはじめとする計 6 民族が登場し、それぞれの母語に加えて英語や筆談などさまざまな手段を使ってからうじて意思疎通を図る日常が描かれている。戦時下にして異色の題材や軽妙な筆致は先行研究から注目され、その裏に井伏の言葉への強い関心があるといわれてきた。中でも、異言語との接触で規範が揺らぎ始めた日本語の問題をめぐる指摘が多く見られるが、それらを踏まえながら、そもそも日本語使用を前提とした中で果たして多言語空間を描き上げることが

可能かという問いから本稿が出発した。そして、井伏の鋭敏な言語意識を明らかにする目的もかねて検討を行ったところ、次のような結果を得た。

まず、登場人物の構成において注目すべき点は民族別よりも、ほとんどの者が2つ以上の言語を話せ、相手に応じて使用言語を自由に切り替えられることである。言い換えれば、どの人物も必ずしも母語を使用するわけではない。また、いつも同じ言語を使用するとは限らない。そのため、誰がなぜ、そしてどのように話したかを知るには、全文日本語で書かれている中、地の文における語りが重要かつ唯一の手がかりとなる。先行研究ですでに言及されていることだが、多言語空間を開示するのに井伏が用いた一つ目の方法はまず語りを通じて発話の意図から手段、内容まで逐一丁寧に説明することである。

しかし、それは全ての言語行為に当てはまることではないという点が本稿の分析で新たに明らかになった。日本語と英語による発話は漏れなく直接話法で提示されているのに対し、馬來語と支那語による発話の声が作品冒頭以外では意味不明なものとして消去されている。背景として最初全知的だった語りが途中から視点人物の知識を反映する自由間接話法へ転換したことが考えられるが、ここに二つ目の方法があるのではないかと指摘した。なぜなら、これにより、4種類もの言語が混在する複雑な状況の中で再現すべき言語を実質的に日本語と英語に抑えることができるからだ。そして、再現された発話の内容を注意深く読めば、その中にこそ多言語性が描きこまれていることが分かる。

日本語の発話は母語話者によるものと非母語話者によるものとに分けられる。その違いに基づいて発話の丁寧さや完成度が変化しており、言葉の純度よりもハイブリッド性を映すことに対する井伏のこだわりがうかがえる。一方、英語発話の場合、先行研究では直訳体や漢語の多用が特徴として挙げられているのに対し、本稿では女性による発話を除き一律口語的要素が少ない文末表現となっていることに着目した。終助詞などがなく、「である」で言い切れる面白おかしい語感、全員非母語話者同士のやり取りの奇妙さを表し、作中の多言語空間を大きく印象づけるものといえる。これを三つ目の方法として結論づけたが、以上で論じてきたように同様な工夫はほかの作品に

も見られる。それらを総合的に考察し、井伏の言語意識をより明確に把握する課題が残る中、本稿で得られた知見だけを再度強調すると、戦前日本の外地を舞台にした作品として『花の町』の真価は日本語の参入でいっそう混沌となる多言語状況への注視のみならず、独自の方法を駆使して真っ向から描き上げたという点にあるともいえる。

注

- ¹ 以下、筑摩書房が 1996 年より刊行した『井伏鱒二全集』の表記にしたがい、作品名を『花の町』と統一する。
- ² 歴史的地名や呼称については、叙述の便宜上、括弧表記を省略して使用する。以下同。
- ³ 井伏 (1998)、p.257。
- ⁴ 前田 (1983)、p.92。
- ⁵ 尹 (2016) では、「徴用文学」を「徴用作家が徴用の所産として紡ぎ出した文学」の略称として使用する。
- ⁶ 連載に先立って 1942 年 8 月 13 日付の『大阪毎日新聞』と『東京日日新聞』両新聞に予告記事が掲載された。括弧内の言葉はそれに付される「作者の言葉」より抜粋したものである。詳しくは前田 (1985) p.70 を参照。
- ⁷ 善隣協会は元々 1933 年日本の蒙古 (現中国内モンゴル) 進出に伴って創設された友好工作機関である。『花の町』では日本にいる華僑との連携で同組織を作ろうとしはじめた現地の動きが描かれている。善隣協会の沿革及び活動内容は善隣会編 (1981) を参照。
- ⁸ このほか、川村 (1996) は『花の町』に関する解説で『言葉』が通じ合わないことについての悲しみ」または『言葉』そのものについての含羞」が井伏文学のテーマの一つであると説明する。西原 (2017) は『花の町』の中でシンガポールの「多言語性」がみごとに表現されているとしている。
- ⁹ 塩野 (2010)、p.50。
- ¹⁰ 塩崎 (1996)。また、佐藤 (1995) によると、戦後発表された『柘助』(1946) などの作品にも、「自然をも含めた対象の声なき声に耳を傾けて書く」という井伏文学の特徴が現れ続けているという。
- ¹¹ 橋本 (2016)、木村 (1992)。
- ¹² 松本 (2016、2021)、阮 (2018)。

13 本文及び引用文の中には一部配慮すべき用語が含まれているが、歴史性を考慮して原文どおりとする。叙述の便宜上、初出の時と強調する時以外は括弧を省略する。以下同。なお、木山は井伏自身、神田は神保光太郎、築地は中島健蔵がモデルといわれている。

14 井伏 (1997)、p.31。

15 同前、pp.30-31。

16 同前、p.51。

17 同前、p.35。

18 同前、p.39。

19 同前、p.86。

20 以下、表記を作中で多く使われる「馬來語」に統一する。

21 後出引用 q に示すように、初対面の木山に対してベンが行った自己紹介では広東語と福建語を両方とも話せることになっている。

22 音声面の特徴に関する言及は、後出引用 l の中にもある。

23 支那人が馬來語を話す場面について、後出引用 h と引用 i を参照されたい。

24 宮崎 (2006)、p.88。

25 塩野 (2010)、p.48。

26 直接話法と間接話法については、菅原 (2017) pp.273-282 を参照。

27 井伏 (1997)、p.37。

28 同前、p.57。

29 同前、p.63。

30 その他の例として『チンチョウ』といふやうなことをいひ」(p.85) が挙げられる。なお、馬來語の場合は「内側で『マリシニ』といふ男の声がした」(p.64) がある。この後に「しかし内側からその扉をあけて出て来たのは支那服を着た可愛らしい娘であつた」という文が続き、言葉の意味を説明するよりも声の持ち主と扉を開ける人が異なることを強調している。頁数は同前。

31 同前、p.61。

32 同前、p.63。

33 同前、p.33。ちなみに、ここにおけるシンフハの発話は英語か支那語か、全文を通して唯一不明な箇所である。

34 本文引用 b はシンフハ自身が支那語で話した内容を英語に言い直す例である。ベン・リョンがウセンの馬來語発話を木山のため日本語に訳する例は同前書 pp.71-73 に見られる。

- 35 「非焦点化（焦点化ゼロ）」と後出の「内的焦点化」については、ジュネット著、花輪、和泉訳（1985）pp.222-227 を参照。
- 36 宮崎（2006）は、木山視点に同化した語りを言語交渉の非中立性を確保するための「癒着的語り」としているが、作品冒頭部の語りが意味することや、そしてなぜ転換が起きたかについては論及していない。
- 37 自由間接話法について、平塚（2017）や芳川（2015）を参照。なお、「再現された言説」と「転記された言説」の違いについては、ジュネット著、花輪、和泉訳（1985）pp.187-217 を参照。
- 38 永井（2022）、p.42。
- 39 鈴木（2008）は石川達三や二葉亭四迷、田山花袋、井伏鱒二を例に挙げている。なお、井伏の受容については、田山花袋と共通してドイツ人作家ゾーダーマンの『猫橋』（1889）翻訳の影響を受けたほか、ロシア人作家チェーホフの作品を経由したものもあったという。
- 40 井伏（1997）、pp.31-32。
- 41 同前、p.40。
- 42 前出引用 c でベン・リヨンが英語で日本人と話す時に「ゆつくりと発音する」ことは既述のとおりだが、もう少し付け加えるなら、彼の母は「拙くない」（p.64）、「丁寧な言葉づかひの英語」（p.70）で、姉は「幾らか吃るやう発音で、しかし早口にいふ英語」（p.68）である。また、マルセンの旦那の一人である築地弁二郎の英語演説は「一方的にしやべりつづけ」と「流暢」（p.45）だが「幾らか尻上り」で「フランス語風」（p.48）の調子だという例も挙げられる。一方、日本語の場合、非母語話者であるベン・リヨンの発音は「割合ひに日本人風の抑揚を採り入れてゐた」（p.34）、ウセンは「舌つたるい声」（p.76）とされる。なお、母語話者である河野軍曹についても「多少、関西訛りのある日本語」（p.74）との記述がある。頁数は同前。
- 43 青木（1988）、pp.36-38。
- 44 森岡（1999）、pp.146-269。
- 45 森岡（1991）、p.431。
- 46 戸塚（2021）。
- 47 槇林（〔1981〕2001）、佐藤（1992）、川村（1996）。
- 48 塩野（2011）。
- 49 芳川（1998）。
- 50 紅野（1998）。

- ⁵¹ 柳父 (2004)、p.102。
⁵² 同前、p.40。
⁵³ 谷崎 (2016)、pp.105-108。
⁵⁴ 同前、pp.110-113。
⁵⁵ 井伏 (1997)、p.68。
⁵⁶ 同前、pp.46-47。なお、リーダーは原文。
⁵⁷ 塩野 (2011) によると、井伏はズーダーマンの『父の罪』の翻訳で主人公宛てに元恋人が差し出す手紙の文面を、二人の関係性が変化していくにしたがって丁寧体と候文といった異なる文体で書き分けているという。
⁵⁸ 井伏 (1997)、pp.80-81。
⁵⁹ 同前、p.34。
⁶⁰ 同前、p.56。
⁶¹ 塩野 (2011) によると、井伏は原作の主人公が愛する女性の発話に対し、過去形の否定文につく語尾の訳語として「ませなんだ」と「ませんでした」を混在させながら、田舎者で召使である低い出自と気持ちの揺れを表したという。なお、同様な表現手法は「朽助のゐる谷間」や「丹下氏邸」(1931) などの作品からもうかがえるとしている。
⁶² 例えば、井伏と同じ 1941 年末に徴用されてビルマ方面に赴いた高見順は 1943 年帰国後に「ビルマ雑記」を発表した。うちの 1 篇にあたる「ビルマ少年」の中では、日本軍人からを日本語を習ったという少年の発話を「ウ、ウレシイノデス」「ニッポン」「ボク、ヘイタイサンニナリマス」(p.305) と表記する。また、戦後 1955 年ラングーンで開催された「アジア知識人会議」参加後に「アジアの情熱」と題した文を発表した。その中では、日本軍の通訳を買って出たことがあるというビルマ人記者の日本語を「ワタシ、戦争ノトキ、ニッポンノ兵隊サン、タクサン、知ッテキマス」(p.402) と表記した。頁数は高見 (1974)。
⁶³ 井伏 (1997)、p.65。

参考文献

- 青木美保 (1988) 「井伏鱒二における社会批評の視点について——作品『花の町』を通して」『比治山女子短期大学紀要』22、pp.31-41。
井伏鱒二 (1997) 『井伏鱒二全集 第 10 巻』筑摩書房、pp.29-104。

- (1998)『井伏鱒二全集 第26巻』筑摩書房、pp.162-410。
- 川村湊(1996)「解説——花の町のまわりで」、井伏鱒二『花の町・軍歌「戦友」』講談社文芸文庫、pp.220-232。
- 木村一信(1992)「阿部知二の徴用体験——『死の花』の背景」『昭和文学研究』25、pp.149-160。
- 黒古一夫(2014)『井伏鱒二と戦争——『花の街』から『黒い雨』まで』彩流社、pp.1-221。
- 阮文雅(2018)「里村欣三『河の民(オラン・スンガイ)——北ボルネオ紀行』考」『植民地文化研究 資料と分析』17、pp.218-229。
- 紅野謙介(1998)「井伏鱒二のフェティシズム——翻訳・言葉・植民地」『国文学解釈と鑑賞 別冊 井伏鱒二の風貌姿勢』至文堂、pp.52-61。
- 佐藤嗣男(1992)「日中戦争下の井伏文体——『へんろう宿』を中心として」『明治大学教養論集』251、pp.117-146。
- (1995)「井伏の文体——『朽助』、そして『病人の枕もと』、『カキツバタ』」『明治大学人文科学研究所紀要』38、pp.243-257。
- 塩崎文雄(1996)「井伏鱒二の言葉——初期井伏文学における〈言葉のざわめき〉についての一考察」、東郷克美、寺横武夫編著『昭和作家のクロノトポス 井伏鱒二』双文社、pp.57-71。
- 塩野加織(2010)「問われ続ける『日常』の地平——井伏鱒二『花の町』論」『日本文学』59(9)、pp.42-52。
- (2011)「翻訳からの出発、あるいは翻訳への上昇——井伏鱒二訳『父の罪』論」『日本近代文学』85、pp.17-32。
- ジュラル・ジュネット著、花輪光、和泉涼一訳(1985)『物語のディスコース——方法論の試み』書肆風の薔薇、pp.1-405。
- 新城郁夫(2003)「郷土・翻訳・方言——井伏鱒二『朽助のゐる谷間』論」『日本東洋文化論集』9、pp.121-159。
- 菅原克也(2017)『小説のしくみ近代文学の「語り」と物語分析』東京大学出版会、pp.1-396。

- 鈴木康志（2008）「近代日本文学における自由間接話法の受容——田山花袋と井伏鱒二の場合」『文学論叢』138、pp.230-209。
- 善隣会編（1981）『善隣協会史——内蒙古における文化活動』日本モンゴル協会、pp.1-421。
- 高見順（1974）『高見順全集 第19巻』勁草書房、pp.1-421
- 滝口明祥（2011）「占領下の『平和』、交錯する視線——井伏鱒二『花の町』」『国文学研究』164、pp.15-26。
- 谷崎潤一郎（2016）『谷崎潤一郎全集 第18巻』中央公論新社、pp.9-160。
- 戸塚学（2021）「影響と翻訳の間——横光利一と堀辰雄の文学言語の転回」『横光利一研究』19、pp.2-14。
- 永井聖剛（2022）「文学史の〈穴〉——主体と非主体とのあいだ」『日本近代文学』106、pp.34-49。
- 西原大輔（2017）『日本人のシンガポール体験——幕末明治から日本占領下・戦後まで』人文書院、pp.181-194。
- 野地潤家（1956）「井伏鱒二之作品の中国弁」『言語生活』61、pp.26-34。
- 野寄勉（1995）「井伏鱒二『花の町』論——軍政下の遠慮と寄託」『芸術至上主義文芸』21、pp.43-53。
- 橋本正志（2016）『中島敦の〈南洋行〉に関する研究』おうふう、pp.1-377。
- 平塚徹編（2017）『自由間接話法とは何か——文学と言語学のクロスロード』ひつじ書房、pp.1-200。
- 平野謙（1972）「解説」『戦争文学全集 第2巻』毎日新聞社、pp.422-431。
- 藤本千鶴子（1984）「井伏鱒二の方言表現——『朽助のゐる谷間』の場合」、磯貝英夫編著『井伏鱒二研究』溪水社、pp.402-412。
- 前田貞昭（1983）「井伏鱒二・その戦時下抵抗のかたち——『花の町』を軸にして」『近代文学試論』20、pp.91-98。
- （1985）「井伏鱒二著作年表稿（昭和16年～20年）」『岐阜大学教養部研究報告』21、pp.47-94。

- 槇林滉二（[1981] 2001）『山椒魚』、松本武夫編『井伏鱒二「山椒魚」作品論集』クレス出版、pp.131-143。
- 松本和也（2016）「昭和16年・文学者が書く蘭印——高見順『蘭印の印象』・『諸民族』」『立教大学日本文学』124、pp.82-95。
- （2021）「南方徴用作家の自己成型——高見順『ノーカナのこと』」『昭和文学研究』83、pp.60-74。
- 松本武夫（2003）『井伏鱒二——人と文学』勉誠出版、pp.109-122。
- 宮崎靖士（2002）「井伏鱒二『言葉について』の訳述をめぐって——小説における方言《翻訳》」『昭和文学研究』44、pp.137-149。
- （2006）「井伏鱒二『花の町』における占領地の表象をめぐって——1930～40年代の言語使用に関わる非均等的な力関係と、その表象をめぐる諸相」『日本近代文学会北海道支部会報』9、pp.93-57。
- 森岡健二（1991）『近代語の成立——文体編』明治書院、pp.430-440。
- （1999）『欧文訓読の研究——欧文脈の形成』明治書院、pp.146-269。
- 柳父章（2004）『近代日本の思想——翻訳文体成立事情』法政大学出版局、pp.1-242。
- 尹小娟（2016）「徴用文学における〈南方〉表象の変容——北原武夫の場合」『九大日文』27、pp.20-38。
- 芳川泰久（1998）「自由を聴き分ける耳」『国文学解釈と鑑賞 別冊 井伏鱒二の風貌姿勢』至文堂、pp.52-61。
- （2015）『ボヴァリー夫人』をごく私的に読む——自由間接話法とテクスト契約』せりか書房、pp.1-233。